関東地区KGK卒業生会誌

コイノニア

koinonia

210号

石 KGK tSHIZUE 70th

特集

キリストの教会を建て上げる

盛岡聖書バプテスト教会牧師　近藤愛哉

連載

「学生世界のリアル」
進路選択を迫られる学生のリアル　大塚 信

「仕事の神学」
助産師　三浦杏子

新主事コラム
あの主事からの手紙　拝高美雪

卒業生会2022年・年間テーマ
KGK礎のことばを見つめ直す

Photo taken by Marek Pawnicki on Unsplash

特集

キリストの教会を建て上げる

building a church of CHRIST

2022年度コイノニアのテーマは「**KGK礎のことばを見つめ直す**」。
第3回の今回は、KGK全国理事の近藤愛哉先生に、
「礎のことば」の「キリストの教会を建て上げる」
を取り上げていただきました。

まず最初に問いを記します。

「あなたにとって、あなたが属する教会とはどんな存在／場所でしょうか？」

幼い頃からその教会の交わりの中で育って来た。進学や就職、結婚を機に、今の教会に属するようになった。礼拝や献金や奉仕など、キリスト者としての「義務」を忙しさの中でも何とか果たす場所でしょうか。

三月に開催されたNC（全国集会）で、「これからの教会」というテーマで主題講演を担当し、「これからの六十年間、日本の教会は皆さんによって建て上げられて行くのです」と学生たちに語りました。六十年というのはあくまでも目安の数字です。卒業生である私たちにとってその数字は五十年や二十年かもしれません。つまりは、学生でも卒業生でも、私たちには「キリストの教会を建て上げる」という、生涯をかけて取り組む使命が与えられているということです。

「教会」という言葉は、主に二つの意味で使われます。イエス・キリストを信じるすべてのキリスト者が属する大きな群れとしての「普遍教会」と、それぞれの地域に集められたキリスト者の群れとしての「地域教会」です。KGKで与えられた交わりは、学内から始まり、ブロック、地区、全国、東アジア、世界へと広がり、私たちが普遍教会の一員であるとの意識が強められます。一方で、それぞれが地域教会に属しているとの意識はともすれば置き去りにされてしまうかもしれません。「全生活を通しての証し」という目標の中で、家庭や学内、職場や地域での生活が意識される一方、既に信仰を持った者たちが集う地域教会での生活は、この目標の中でどこに位置づけられるのでしょうか。

新約聖書から「教会」について考えてみます。マタイ十六章（マルコ八章、ルカ九章）には、ピリポ・カイサリア地方でのイエス様とペテロのやり取りが記録されています。「あなたは生ける神の子キリストです」というペテロの信仰告白に対してイエス様は、「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます」と宣言されました。（ここで言う「教会」（エクレシア）とは、建物ではなく人の集まり／群れを意味します。）

ペンテコステ（使徒二章）の後、イエスがキリストであると告白する人々の群れはエルサレムで急拡大しました。ほどなくして始まった迫害により人々は散らされたことにより各地に教会が生まれました。迫害者パウロのダマスコ途上での回心は、さら

執筆者紹介

・近藤愛哉（こんどうよしや）
・国際基督教大学 2000年卒
・保守バプテスト同盟 盛岡聖書バプテスト教会牧師
・KGK全国理事

に教会が誕生するための大きな転機となりました。伝道旅行と呼ばれるパウロの宣教の記録を私たちは読むことが出来ます。しかし見逃してはならないのは、パウロが教会の誕生のためだけでなく、各地の教会が建て上げられるために尽力していたということです。恥ずかしながら、以前の私は新約聖書の「手紙」を読む時に、その内容を自分の信仰の糧として受け止める、非常に個人主義的な読み方をしていました。しかしそれらの手紙がことごとくそれぞれの地域の教会に宛てて書かれていることを理解した時、教会に対する視点の大転換がもたらされました。

「重要なのは神との交わりであって、人との交わりは煩わしい」「神は素晴らしい。信仰に生きることも素晴らしい。でも教会に行くと失望するし、疲れてしまう。」このような言葉を耳にしますし、意図するところを理解します。教会内で生じる様々な不信仰の問題、人間関係のこじれ、結婚や家族間のトラブル、不一致や分裂…何故教会でこんな思いをしなければならないのかという現実があります。

しかし聖書は実に正直に一世紀の教会の現実を教えてくれます。例えば、エルサレムの教会では、福祉事業とも言える食事の配給からトラブルが生じました（使徒6章）。コリントの教会はねたみや争い、淫らな行い、思い上がり、差別、自己中心、誇り…と問題のオンパレードです。エペソの教会の牧会者テモテは教会内の異端信仰との対決に疲弊し、クレタの教会の牧会者テトスは分派の問題に苦慮していました。

赦されてはいても「罪人」の群れである教会には当然のように問題が生まれます。しかしパウロと一世紀の諸教会は、教会内の問題に苦慮、苦悶、苦闘しながら、それでも教会に対する神の約束と計画とを信じていました。教会とはただ礼拝をささげる場所ではなく、教会こそが福音に生きる場所と捉え、教会の中でこそキリストが証しされることを追求し続けていたのです。

現在、私が牧師として仕える教会では、軒並みKGKの卒業生たちが役員を務め、私と共に牧会の大変な責任を担っています。それぞれの家庭や仕事、自身が抱える問題でも手一杯と思われるのに、教会内の問題にも深く関わるからです。そんな彼らがある役員会においてこんなことを語り合っていました。「教会内の痛みに触れ、自分たちも苦しむ現実がある。しかしそのような現実こそが『教会』として組み合わされて成長するためだと聖書は教えている（「キリストによって、からだ全体は、あらゆる節々を支えとして組み合わされ、つなぎ合わされ、それぞれの部分がその分に応じて働くことにより成長して愛のうちに建てられることになります。」エペソ4：16）。だから私たちは毎週『教会を信じる』と使徒信条を通しても告白する。この苦しみの中でも、諦めることなく『教会として生きる』時に、そこに主の愛と回復が備えられていることを信じ、教会を建て上げる歩みを続ける。」私はこの役員たち、教会員たちから「教会」について教えられ続けています。

教会を建て上げるとは、教会に生きること。私たちは生涯をかけて教会に生き、教会を建て上げて行くのです。最後に問いを記します。

「あなたが属する教会にとって、あなたはどういう存在でしょうか？」

役員会コラム

学生支援とは

私が卒業した信州ブロックでは、学生と卒業生による世代を超えた交わりがあります。年に4回ほど学び会や遊び企画があり、卒業生は車の運転や買い出し等の準備に関わることが多いです。ですがそれを通して今の学生を知り続けることができ、学生の悩みは何か、卒業生は何か協力できないかと学生と関わり続けることができます。また学生の信仰に歩もうとする姿を見て、かえって卒業生も励まされます。学生支援による卒業生の世代を超えた交わりは、卒業生自身の信仰の鮮度を保つことにもつながっています。

こと信州においては物理的な距離の遠さが理由で、学生が助けを必要としており、卒業生と学生との定期的な交わりが持てています。関東地区では職域別祈祷会や職域エキスポを通して学生と卒業生の交わりが継続されていますが、他のブロックでもそのような交わりが形成されてくれることを願っています。

卒業生は学生時代に直接関わりのあった後輩が学内にいる間、祈りと献金を持って支えたいと思いやすい傾向があります。しかし、顔を知る後輩も卒業し、いよいよ知る学生がいなくなるとき、支援を辞めてしまう卒業生も現れがちです。支援から離れてしまうきっかけを役員会の中で議論した結果、以下の5つが挙げられました。

1. 学生の顔が分からなくなる
2. 主事の顔が分からなくなる（主事が自分の代表と思えなくなる）
3. 自分が卒業生（KGKを支える）であるという意識を失う
4. 今の生き方にKGKスピリットが意味を持つと思えなくなる
5. 学生宣教の意義が分からなくなる

では卒業生が学生を支援するためには何ができるでしょうか。卒業生がKGKを支援するためには卒業生自身がKGKスピリットに生きている必要があります。それは例え苦難にあっても交わりに留まり、福音に生きることを諦めず、その生き方を体現していくということです。

学生支援には何よりも祈りとKGKスピリットを握り続けることが必要です。卒業生達がKGKで受けた恵みを思い起こし、今の学生のために祈り、KGKスピリットに生きることを示し続けたからこそ、KGKが75年も続いてきたのではないでしょうか。

KGKはあなたにとって何であったか、何であり続けているかを思い起こしてみてください。あなたにとってのKGKは、学生時代のひとときの思い出にとどまらず、クリスチャンとして歩むための礎としてあなたを支えているでしょう。役員会では今後の卒業生会の活動のためにあなたのご意見を必要としています。ぜひご気軽にご意見をお送りください。→kantokgkobog@gmail.com

信州大19年卒
星出 雄太

KGKホームカミングデー2022

準備委員　東京大80年卒　鯉渕 信也

「立ち止まり、思い起こして、再起動」をテーマに、卒業生会では久しぶりの対面を含むイベントとしてホームカミングデーを2022年9月10日に実施しました。講師は、太田和功一元総主事です。島根県からオンラインで「静まりの導き」をしていただきました。「信仰の危機はありましたか。回復はどのように与えられましたか。そのことで、学んだことはありましたか。」と30分間内省することを導いていただきました。メッセージを聞くというのではなく、太田和先生のファシリテーションでじっくりと考えることができました。「神様がともにいてくださることが最大の恵み」とのウェスレーの言葉を引用して締めくくってくださいました。珍しい体験で興味深いものでした。アンケートでも、これまでの人生を振り返り、神様の恵みを確認することができたとの趣旨の回答が多くありました。

集会としては、オンラインも含めて、幅広い年代の方が100人程度（お子さんを含む）参加してくださいました。お二人の方が証してくださいましたが、心打つものがありました。結婚や、教会が変わること、仕事の悩み、転職、そうしたことの中で、KGKで学んだ、「遣わされた地で福音に生きること」をこの世と闘いながら実践している姿を聞くことができ、励まされました。グループタイムは4人ずつに分かれましたが、世代の違う交わりは面白かったです。私のグループでは娘の友人の皆さんとお話ができ嬉しかったです。

最後に、学生会、卒業生会、主事会からの報告をいただきましたが、その中で、1点気になったことがありました。学生の会員数は減少傾向だということです。コロナ禍ですので、学内活動が思うようにはできていません。卒業生としては、由々しい事態です。今年度は久しぶりに対面での活動が復活してきており、巻き返しが期待されます。何としても、お祈りと献げものをもって、主事と学生を応援しましょう。

Water color vector provided by freepik.com

副総主事・全国卒業生会担当
塚本良樹主事コラム

若手合宿の意義

関東地区卒業生会では、2023 年 2 月 17〜18 日、おそらく初めての試みとして若手合宿が開催します。前号で、副会長の伊田準さんが書かれていましたが、今年度の卒業生会役員会としては、若手卒業生の支援に特に取り組んでいきたいと考えています。もちろん、今後も全世代の同期会や職域別祈祷会、学校・地域別の交わりを支援していきたいですし、ホームカミングデーや全国職域エキスポのような全世代対象のイベントも大切です。このコイノニアも全世代に向けて書かれています。

しかし、合宿という、長時間寝食を共にする交わりを特に必要とするのは、若手卒業生です。卒業直後、多くの卒業生は、キリスト者の交わりが激減します。職場において、様々な困難を経験しても、他のキリスト者からの励ましを受けることが難しくなります。キリスト者ではない方々と多くの時間を一緒に過ごすなかで、この世の価値観からの誘惑をより強く経験します。人によっては、住む場所や出席教会が変わることで一時的に交わりが希薄化することもあります。だからこそ、もう一度、あえてより深い交わりに身を置き、学生時代に学んだ KGK スピリットを学び直す必要があると考えています。近い世代だからこそ、学生時代を共にしていることも多いため、交わりが深まりやすく、学生時代の光景を思い出しやすいという側面もあります。

実は、若手卒業生に限定した交わりをもつというアイデアは関西地区から学んだものです。関西地区は若手合宿・祈祷会が定期的にもたれており、そこで若手卒業生たちが大きな励ましを受けているそうです。

若手卒業生には、学生時代ほどの頻度は不可能だとしても、キリスト者の交わりに身を置き、KGK スピリットを卒業生という立場で受け取り直してほしいのです。そのような交わりから、生涯にわたって遣わされた職場、家庭、教会で福音に生きることを諦めない卒業生たちが送り出されることを願っています。ぜひ 2 月の若手合宿のために覚えてお祈りください。

家族のかたち

近藤　信

○相手がいることで「助かっているなあ」と思うことは？

健やかな時も病の時も、国内外どこで暮らすときにも、ぶれずに変わらずに家族と教会に仕える姿勢。

○今だから言える夫婦の危機は？

「仕事第一」で家族と過ごす時間がごく短かくなり、忙しさを理由に正当化した時。死海にレンタカーの鍵を落として発見できなかった時。

○相手と過ごした大切な「時間」は？

毎日曜日教会への片道1時間の車中。毎日曜夜の家族祈り会。「病気を通して神様から教えられたこと」の答え合わせと分かち合い。

○相手を聖書の人物に例えると？

ともしびの油を切らさずに花婿を迎えた娘（マタイ25章）

○最近、相手に言えてなかった一言は？

いつも霊と肉の健康を支えてくれてありがとう！（でもたまには辛いラーメンも食べたいです・・。）

近藤　真紀

○相手がいることで「助かっているなあ」と思うことは？

一家の大黒柱なので、経済的にはもちろん、それ以外にも祈りをもって家族を支えてくれているところ。

○今だから言える夫婦の危機は？

思い返せば数々の夫婦の危機、数々の家庭崩壊の危機が・・。「うちはワンオペだから」という娘の認識に出会った時は愕然となりました。

○相手と過ごした大切な「時間」は？

1年前信が病気で生死の境をさまよった時。退院後の濃ーい分かち合いも良かったけれど、入院中の連絡の取れない日々。実際には会えないけれど、お互いの場所で神様により一つとされていた。

○相手を聖書の人物に例えると？

よく学び、記録をするのが好きなのでルカかな。

○最近、相手に言えてなかった一言は？

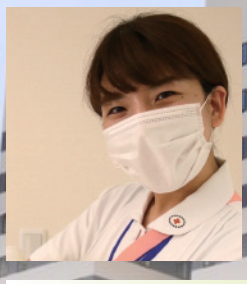
一応なんでも言っているので無し。

夫　近藤　信
東京大 98 年卒
教会　キリストの栄光教会
仕事　国家公務員
家族　妻と娘 2 人（大学3年、高校1年）
趣味　読書、美術館めぐり、ランニング、野球観戦、マグカップ収集、教会エンタメ・プロデュース
好きな食べ物　酸辣湯麺、毎日の手作り弁当

妻　近藤 真紀
東京福祉専門学校 98 年卒
教会　キリストの栄光教会
仕事　大学とトレーニングジムのパート
家族　夫と娘 2 人（大学 3 年、高校 1 年）
趣味　ストレッチとヨガ、物作りと整理
好きな食べ物　月餅とコーヒーの組み合わせ

Vector image provided by jp.freepik.com

三浦杏子



K.Miura

日本赤十字看護大学 2017 年卒
日本赤十字社助産師学校 2018 年卒
さいたま赤十字病院 MFICU 助産師

Theology of Work
仕事の神学

わたしは神から何を任されているのか
神の世界において何のプロフェッショナルとして召されているのか
キリスト教の視点でわたしたちの仕事を「神学」するリレー連載

Professional 助産師

三浦杏子にとって「助産師」とは――創造されたいのちを神様と一緒に、大事にすること

助産師、英語では midwife。その語源は Mid（with）＝共にいる、Wife＝女性、とのこと。妊娠期、分娩期から産後のサポートを中心に、性教育や育児指導など、働きの範囲は広い。女性とその家族に寄り添う仕事と言える。

病院で働く私は、外来での健診や分娩介助、母体胎児集中治療室（MFICU）でのケアを日替わりで行っている。MFICU には母体や胎児に疾患がある妊婦さんが入院しており、双方にとって最も良いタイミングで分娩となるように治療をしている。

助産師として 5 年。これまでを振り返ると、助産師としての基盤になっている1つの出来事がある。それは1年目7月。胃腸炎の妊婦さんを受け持っていた。問題なく勤務終え交代した後、その赤ちゃんの心音は確認できなくなってしまっていた。自分の明らかな過失というわけではないが、あまりにショッキングな出来事であった。責任の重さに恐くなり、神様に辞めたい、恐いと祈り続けていた。数週間たった頃、KGK の友人と、Challenge Camp の講師だった先生と交わりを持つ機会があった。先生と友人にこの出来事を話した。帰りがけ、先生は「杏子さんが感じる責任は、主が命に対して思ってくださる重みと一緒です。」と祈ってくださった。私はその祈りの言葉に大きな励ましを得た。神様が一つひとつのいのちに思ってくださる重みを、私も感じるようにと、この場に置いてくださっているとするならば、それならやるしかないな、と思えた。また詩篇100：3～5にあるように、私自身も主のものであり、全部のいのちが主のものであることを実感した。主により頼む他ないと確信した出来事であった。これがクリスチャンの助産師として働く核となっている。

働きの中で記憶に残る嬉しかった関わりも、冷や汗をかいた場面もある。中でも分娩介助は神様の不思議、創造の美しさを目の当たりにする時間である。お母さんの陣痛のパワーに合わせて、赤ちゃんは回転しながら出口に向かって降りてくる。私も一緒に頑張らせてもらうこと、最初に赤ちゃんに触れることが許されていることが本当にありがたい。分娩後はお母さんに頑張ってくださったこと、貴重な時間を共有させてもらったことなど感謝を伝え、思いを聞きつつ、分娩を振り返る。改めて分かち合えるこの時間がとても好きだ。今後働き方を変化させていったとしても、新しいいのちが、そして私たち自身が、どれだけ神様に愛しまれて創造されたものであるかを伝えていくことができたらと願っている。

KGK の先輩が当院で出産されました。
げっぷを出すのを手伝っているところです。

ブックレビュー

『魂のサバイバルガイド 達成志向の世界で霊性を養う』

ケン・シゲマツ 著、重松早基子 訳、いのちのことば社、2020 年

ふと気がつくと、聖書を読んで祈る時間よりスマホを見ている時間のほうがはるかに長くなっている一一コロナ禍になってから、自分の中でその傾向はさらに顕著になりました。仕事に追われ、家に帰っても何か通知が来てないか気になる。癒しは、動画鑑賞とSNS。恐れは、失敗すること。仕事ができない人だと思われること。常に自分のことで精一杯。このままではダメだと思った時、本書を手に取りました。本書は、成功や賞賛を欲する「達成を求めるアダム」と、神に仕え人を愛する「魂を求めるアダム」、双方のバランスを最適化し、最善の自分になるために、霊的習慣が必要だと語ります。「霊的習慣は、神から愛されているという根本的な真理を継続的に意識するよう私たちの心を訓練するためのものです。過去に衝撃的な回心の経験をしたとしても、霊的な記憶喪失のために私たちは神の愛に毎日目覚め、新生の体験を繰り返す必要があります。」本書には様々な霊的習慣が紹介されています。神から愛されている自信がない、人からの失望や失敗の恐れから解放されたい、いま一度信仰生活を立て直したい…そんな方にオススメです。ぜひ一緒にこの習慣づくりに挑戦しましょう！

紹介者 文教大18年卒 岡村みむね

学生世界のリアル

主事の働きを通して知る、今のKGK。
主事の視点から見る、学生宣教の最前線。

関東地区主事　**大塚　信**

担当　ちばブロック、茨城ブロック
所属教会　JECA めぐみの丘チャペル

「進路選択」は、学生にとって恋愛結婚、人間関係と並ぶ大きな悩みである。コロナの影響はどのように現代の学生の進路選択に影響を与えているのだろうか。彼らは何に悩み、何を求めているのだろうか。そして、彼らより先に学生時代の先を歩むことを許されている私たちにできることはあるのか。そうしたことを学生宣教に携わる一主事として考えてみる。

進路選択を迫られる学生のリアル

「どのように進路を選択したらいいかわからない。」頻繁に学生たちから持ち込まれる相談である。現在の状況が以前と決定的に違うのは、現在就活をする学生の多くが「入学してからずっとコロナに悩まされてきた学生たち」であること。

進路選択は大きな選択のためいつの時代も不安を覚えたり悩んだりするものである。しかし、この疫病時代の中、多くの学生が外出自粛を迫られ、社会と接点を持つ機会が激減し、進路選択に対する不安がさらに増している現実がある。

インターンシップをしてもオンラインで行われることがほとんどなので、対面での体験に比べて業務の理解も不確かになりがちだろう。「留学やボランティアもコロナでできず、履歴書の『学生時代に力を入れたこと』の欄に何を書いていいのかわからない」という学生もいる。

しかし、学生の心の中の問い、いや「叫び」とも呼べる声はもっと深くにあるのかもしれない。進路相談で来る学生たちが口にした言葉で印象に残っていることがある。「信仰を持っているはずなのに不安だと感じます。自分は福音をまだよく知らないことに気づいたんです。もっと福音を知りたいんです。」という趣旨の言葉。驚くことに複数名の学生から同じようなことを耳にした。

何もかもが不確定で不安な情勢が続くこの時代だからこそより感じる渇望。あるいは、コロナで揺るがされたからこそ見えた自分の福音理解の弱さを垣間見たのかもしれない。

就活生だったかつての私も不安を抱えていた。もがいている時に声をかけ助けてくれたのが人生の少し先を歩む主事やKGKの卒業生たちだった。親身になって悩みを話を聞いてくれたこと、そして葛藤しながらも福音に立ち続けている信仰の先輩たちの姿に何より励まされた。今の学生たちにこそ、信仰の先輩たちの存在が必要なのではないだろうか。

私は主事として学生に福音をもっと豊かに伝えていきたい。しかし、私は卒業生の方々にも協力を仰ぎたい。あなたの周りにいるあの学生に声をかけて寄り添って頂きたい。学生と年齢が離れていてもよい。「よかったら話聞くからね」と声を掛けてもらうだけでも、どれだけその学生にとっては慰めであり、励ましだろうか。

あの主事からのてがみ

KGK関西地区非常勤主事
元関東地区主事

拝高美雪

趣　味	観劇、カフェ巡り
学生時代の専攻	教育学部養護教諭養成課程 （保健室の先生になる勉強をしていました）
性　格	お姉さん気質
マイブーム	SNSで出産・育児情報をみること

ご無沙汰しています、KGK 主事の拝高美雪（旧姓：会田）です。2014年から6年間関東地区の主事として働いた後、結婚に導かれ、今は大阪府にある高槻福音自由教会の牧師夫人として教会に仕えながら、KGK 関西地区の非常勤主事として働き、3年目を迎えています。

関東地区の働きに就く前には、九州地区でも非常勤主事として4年間働いていたこともあるので、関西地区は3つ目の担当地区になります。それぞれ地域ごとのカラーはありますが、どの地区も学内活動が KGK 活動の中心であることに変わりはありません。ただ関西地区に赴任した際に大きく異なったのは、コロナの影響で全ての学内活動が zoom で行われていたことでした。パソコンを開くだけで学内を訪問できる手軽さや、移動時間が減った分を学生との時間に使えるなどの良さがオンラインの学内活動にはありましたが、やはり交わりにおいて対面に勝るものはありません。ですから今年に入って、ようやく全ての学校を直接訪問できるようになったときの感動はひとしおでした。この学校訪問の他に、もう一つ働きの中心にあるのがブロックの祈祷会です。それも関西地区ではブロックの祈祷会を毎週行っています。非常勤の主事になり、常勤で働いていた時より学生たちと関われる時間が格段に減った今、それでもブロックの学生たちと毎週会うことができることは、私にとって喜びです。

学生伝道の働きには様々な側面があり、主事に求められるものも多岐に渡ります。その中で、学生たち自身の声に耳を傾け、その心に寄り添い続けることで、彼ら自身がイエス様をより深く知っていくことができるようサポートすることが、私にとっての一番の重荷であり、また願いです。それはこの働きに初めて従事した九州時代から変わらない思いです。ですから主事として働ける日数が少ない中で、そのことに集中することが叶う形で、関西地区での働きが与えられていることに心から感謝しています。

さて、ここまで関西地区における私の働きを紹介してきましたが、実はこの11月に第一子を出産予定で、10月から産休に入っており、出産後も育休を取得予定です。対面の活動が増えつつあるこの大事な時に、長期の休みをとることには後ろ髪引かれる思いもありました。しかしこの時期に子どもを授けてくださったことも主のご計画のうちにあると受けとめ、今は生まれてくる新しいいのちとしっかり向き合い、家族で過ごす時間を大切にしていきたいと思っています。ですが、主がゆるされる限りは、この働きにも従事し続けたいと願っていますので、育休が明けましたら、また学生伝道の現場に戻ってくる予定です。

人生の新しいステージを迎える中で、母として、また一人の信仰者として主に整えられていく日々がこれから待っているだろうと想像しています。そして学生たちに対してもまた、私が現場を離れている間も変わらず主が働かれて、成長へと導いてくださることでしょう。そうしてお互い成長した姿でまた再会できることを楽しみにしつつ、この休みの期間を過ごしたいと願っています。

キリスト者学生会 関東地区卒業生会誌　コイノニア　2022年11月 210号

編集委員：関山宜孝、小谷枝薫、桑島大志、阿部聖香、西村信幸、吉田明理、林直也、道法涼子、河野言葉、塚本良樹（主事）
発行：キリスト者学生会関東地区卒業生会　東京都千代田区駿河台 2-1　OCC ビル 3 階
TEL/FAX：03-3294-6916/6050　郵便振替：00170-1-83649　発行部数：1600 部 / 年 4 回

【お詫び】
209号の「家族のかたち」で、唄野絢子さんの卒業校に誤りがありました。正しくは、日本女子大学です。お詫びして訂正させていただきます。大変申し訳ございませんでした。

【編集後記】
コイノニアの編集の奉仕は、入稿日や締切があるので緊張感もありますが、チームの奉仕なので、編集委員のメンバーにいつもとても励まされています。現在は10名の編集委員のうち、私を含めた3名でレイアウトの作業を分担しています。紙面のレイアウトにご関心がある方や、Adobe Illustratorを使ってみたい方（未経験やソフト未所持でもご相談ください）に、この奉仕に加わっていただけるといいなと思っています。ZOOMで会議をできる時代なので、遠方の方も歓迎します。ご関心がある方はぜひ、KGKの事務局にご連絡ください！（小谷）